人と地域の多彩なローカルを編み出す労働者協同組合の可能性

古村（ふるむら） 伸宏（のぶひろ）

一昨年秋に施行された労働者協同組合法は、静かに広がりを見せています。今日までに73法人が設立され、2つの連合会が結成されました（2024年2月22日現在）。私たちが思い描いていた広がりを上回る、多様で多彩な労働者協同組合の誕生が続いています。しかし、法の目的に即していえば、多様な就労機会の創出や地域ニーズの事業化、そして持続可能で活力ある地域社会の実現は、数と質の両面で評価する必要があり、その意味ではこれからが本番と言えます。

協同組合は非営利組織と言われますが、経済活動を基盤としています。今、協同組合はどんな地域経済を構想し実践するのかが問われています。しかも、2025年は2度目となる「国際協同組合年」（IYC）となります。その意義はまさに持続可能な世界の実現であり、協同組合に対する国際的な期待の高さを感じます。持続可能性をめぐる経済のあり方は、人々の暮らしや企業の経営、地域や公共のあり方などと深く関わっています。世界に類を見ない少子高齢化と人口減少が進む日本において、新たな社会モデルとその中での協同組合の役割が問われています。こうした背景から、労働者協同組合はどのようなインパクトと可能性を持ちうるのか、設立された労働者協同組合を俯瞰（ふかん）しながら、その傾向と方向を探りたいと思います。

設立された労働者協同組合は、以下のような特徴が見られます。①新しい多様な働き方への欲求、②地域の課題解決と魅力の開発を、地域の自治力の向上と結ぶ、③子ども・若者をはじめとする未来志向の学びと体験の探求、④長寿高齢社会の高齢期をデザインする仕事と生きがい、⑤地域の個性を活かし高める地域産業の創出。

こうした指向性を持ちながら、様々な人たちが思い入れや新しい価値観を共有しながら歩みを始めています。事業業種や分野・テーマが多岐にわたる中で、共通性が見いだせるのは、「自分たちで」という主体性や当事者性と、人と人・人と地域・人と自然など、様々な関係のあり方を「協同・共生の関係」に結び直そうと意識化されている点です。

具体的にどのような労働者協同組合なのか、その概略を5つ紹介します。

まず第1に多いのは、福祉や教育などの分野で、当事者の尊厳や主体性を大切にするケア（それを保障する働き方）を目指す取り組みです。中には既存の福祉事業者から独立したケースも含まれますし、目立つのは不登校やひきこもる子ども・若者の増加を背景とし

ながら、体験的で対話を重視する学びの場として、森のようちえんやフリースクールに取り組む事例です。

2つ目に、森林・田畑・水などの自然資源や、空き家・遊休施設などの活用を地域活性化につなげる取り組みです。生物多様性や土壌環境の改善を意識したガーデニングや造園、農福連携・6次産業化に取り組む事例もあります。

3つ目に、自治会や社会福祉協議会、JAや生協などの地域・協同組織における活動の事業化です。これは、様々な組織の弱体化や活性化と関わり、ハイブリッド化した組織連携のプロジェクトの性格を持っています。

4つ目に、個人事業主や士業、企業退職者などが経験やスキルを活かす仕事づくりです。

5つ目に、移住者や地域おこし協力隊、任期付き公務員などが取り組む、新しい公共の視点での地域づくりです。デザインやアートなど、表現活動と協同活動を結ぶ仕事も登場しています。

日本の労働者協同組合は大切な胎動期にあります。事業規模も小さく、働く組合員の関わりも深いとは言えません。現に副業として労働者協同組合に関わる人々が多い状況にあります。したがって、労働者協同組合の検証にはしばらく時間を費やす必要がありますが、評価の主軸は、働く組合員の仕事に対する主体・主権・当事者性と、これをエンパワーメントしあう関係性、協同の関係にあります。それは社会全体を覆う諦めやお任せ、孤立・分断を生む利己や対立といった構造を、職場と地域から、小さな仕事をめぐって少しずつ・一つずつ転換していくという、息の長い取り組みです。しかしこの体感こそが、社会の原理を協同に転換しうる道に思えます。一人ひとりの「協同・共生・共存の体感・実感」がなければ、民主主義的な社会の成立は不可能です。戦禍や環境破壊という世界を覆う対立と支配の構造を、ローカルな手応えから一つひとつ解体する試みが労働者協同組合づくりと捉え、「働く」を商品や道具のように扱う世界を突き抜けて、一人ひとりがディーセントワークを手にすることが重要です。働くが変われば職場や企業・くらしやコミュニティが変わる。そしてそれは、経営や経済のあり方を変える道でもあります。小さな経済規模でゆっくりとした歩みの労働者協同組合は、お金や規模・効率に支配されない、真の豊かさとは何かを探求するものです。粘り強く、個性豊かな人と地域＝ローカルを育み根づかせていきたいと思います。

（日本労働者協同組合連合会（ワーカーズコープ連合会）理事長）